

【氏名】 渡部 瑞希

【所属大学院】（助成決定時） 一橋大学大学院

【研究題目】

ネパールの首都、カトマンズにおける金銀細工師スナールの「不可触民」としての生活実践

【研究の目的】

ネパールの不可触民は、他のカースト・民族集団と接触のない「内向的な社会的立場」にあり、その経済機会の乏しさが問題視されてきた。しかし、不可触民の一つ、金銀細工職工カーストのスナールは、現在、カトマンズの観光市場で多くの労働機会を得ており、経済的に裕福になる者も出てきている。こうした金銀細工師の需要に伴い、「浄」の社会身分に属するブラーマンやチェトリ、ネワール族といった、高位のカースト・民族集団も、金銀細工師「スナール」として観光市場に参入している。この現状から、カトマンズの都市住民の間では、「スナール」という概念が、不可触民というよりも、単に職業を示す「金銀細工師」として解釈されるようになっている。本研究の目的は、こうした要因を、スナールの経済機会の向上と不可触民であるスナール自身の実践、他のカースト・民族集団が金銀細工師として観光産業に参入している現状から明らかにすることである。

【研究の内容・方法】

調査拠点：カトマンズの観光市場、ジョチェン、タメルにおける工場・宝飾店舗

調査期間：一次調査：2006年10月～2007年3月（12月～1月の1ヶ月間、日本へ一時帰国）

二次調査：2007年6月～2007年9月（現在も調査続行中）

研究方法・内容

①宝飾店舗の店主や職人を対象に、ジョチェンとタメル地区編成とスナールが観光産業に参入する過程に関する歴史語りを収集した。スナールは、1960年以降、ヒッピーの安宿街として形成されたジョチェンにおいて、ジュエリー店を構えるネワール族の金銀細工職工カースト集団、サキャやバジュラチャルの金銀細工師として労働機会を得るようになった。こうした労働機会を経て、スナールの中には、職人から商人へと社会的立場を変え、経済的に豊かになる者もでてきている。

②社会的・経済的立場を得たスナールが、不可触民としての立場をどのように操作するようになったかに関し、スナールの店舗・工場での聞き取り調査を行った。商人となったスナールは、自身の存在を外部に表現する際、金属職工カーストを示す「ヴィシュワカルマ」の名称を使用しない。彼らは、ブラーマンやチェトリのカースト名である「Risal」や「Bista」などの高位カースト名を名乗ったり、「Century」や「Kaliraj」といった新たなカースト名をつくりだしている。このような自称の変更や創造というスナール自身の実践によって、「スナール」という枠組みが高位カーストと混同され

たり、ヴィシュワカルマ以外の別のカーストととらえられるようになったと考えられる。

③スナール以外の宝飾商人・職人を対象に「スナール」に関する認識調査を行った。

その結果、「スナールとは金銀細工師のことであり不可触民ではない」が86%、「スナールとは村落部出身のブラーマンやチェットリである」が6%、「スナールはカミ（金属職工カースト）と同様の不可触民である」が3%、その他5%というデータがでた。この結果から、スナールを不可触民ととれない傾向が確認できるが、このことは、金銀細工師として働くネワール族のサキヤ、バジュラチャルヤやその他のカースト・民族集団の多くが、自身の立場を「スナールである」と表象する実態からも裏付けられる。

【結論・考察】

カトマンズの観光市場において、不可触民の一つ、金銀細工職工カーストのスナールは、不可触民というよりも、職業を示す「金銀細工師」として解釈される傾向にある。この要因として、本調査では、①観光地におけるスナールの経済機会の向上、②スナール自身による自称の変更と創造という実践、③金銀細工師として職を得ている多様な出自民族集団も「スナールを自称する実態を明らかにした。

この結果からわれわれが考慮すべきことは、不可触民に限らず社会的弱者の社会的・経済的立場の向上がどのように達成されているかという問題である。社会的弱者の地位向上は、意図的な人権運動や社会運動によってのみもたらされるものではない。われわれは、こうした運動とは直接関係のないところで達成されている、多様な社会的・経済的状況にもより目を向ける必要がある。